

### シリーズ「外国につながる子どもたち」

## 希望への橋渡し

学校教育を 考える

### ⑤6 語学教育と

## 「グローバル人材」育成を問う

「外国につながる子ども」たちの学校教育を  
考えるシリーズ。第56回は、地球規模の、  
または全地球的な活躍を意味する「グローバ  
ル人材」について考える。日本で「グローバ  
ル人材」というと、「留学経験者で、高い英  
語力を使って海外で活躍する人」というイメ  
ージが強いが、明治学院大学・教養教育セン  
ターの高桑光徳教授は、「日本国内で多文  
化・多民族共生の社会づくりに尽くす者も  
「グローバル人材」。その意識を構築するに  
は、語学教育の在り方も影響する」と語る。

日本には外国人労働者や外国人配偶者、技  
能実習生、難民など、190カ国以上の「外  
国にルーツがある人」が暮らす。しかし、  
近現代の日本では、アジア諸国などの人々を  
蔑視し、また外国人を単なる「労働力」と見  
なしてきたため、さまざまな人権侵害が生じ  
ている。

こうした状況を改善しようと、キリスト教  
系の明治学院大学は2年前、「内なる国際  
化」プロジェクトを立ち上げた。その目的  
は、国籍・文化・民族等の違いを問わず、誰  
もが安心・安全に暮らせる日本の社会づくりに貢献できる人材の育  
成だ。

同プロジェクトを

案じた高桑教授が、日本を多文化・多民族共  
生社会にする「内なる国際化」について真剣  
に考え始めたのは、日本での英語教育の在り  
方に疑問を感じてきたことがきっかけだと、  
こう話す。

「英語は、歴史的な意味での権力構造の中  
で特別な位置にあり、日本人の多くは「西洋  
文化・西洋人・英語」を「上位」に見る傾向  
があります。しかし、世界には5千〜6千の  
言語があり、全ての言語に優劣はなく、英語  
もその一つに過ぎませ  
ん。それなのに、日本では英語が特別視され  
ている。これはどうなのだろうか、という思  
いがずっとあったので

「英語を優位に置くこ  
とは、真を返せば、無意識に軽んじる結果  
になる。日本で、アジアやアフリカ、中南米  
などの人々への差別や  
いじめが起きているの  
も、こうした語学教育  
の弊害が一因になって  
いるのではないかと、  
高桑教授は感じました。  
そもそも日本で英語  
教育がうまくいかない  
理由は、日本社会の中  
ではほぼ英語を必要と  
しないからだ。」

「それなのになぜ英  
語を学ぼうとするので  
しょう。英語学習者  
に、英語を選んだ理由  
を聞くと、ちゃんと答  
えられないし、英語を  
使って何がしたいのか  
も分からない。そもそ  
も英語を一つの言語と  
して選んでいないこと  
にさえ気付いていな  
い。単なる優位性の選  
択肢の中で選んだだけ  
だから、一つの言語と  
して英語を勉強する覚  
悟もできていないわけ  
です」

そうした「英語の優  
位性」思想から始ま  
る、他の言語や文化へ  
の差別や偏見を除去す  
る取り組みとして、高  
桑教授は、語学教育の  
在り方について考え始  
めた。まず目を向けた  
のは、日本における在  
留外国人の現状だっ  
た。

日本に住む外国人の  
数は、米国人よりネパ  
ール人が多い。在留外  
国人の人数上位国は、  
1位・中国、2位・韓  
国、3位・フィリピン、  
4位・ベトナム、5位・  
ブラジル(昨年末時点  
で全体の75%が  
始まると思うので

近くを占める。いずれ  
も英語圏ではない。

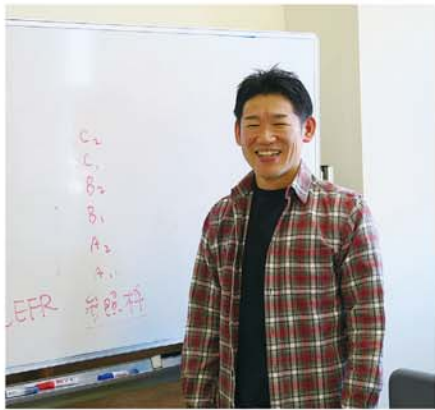
彼らは、難解な日本  
語を必死で学び、日本  
に定住しようと努力し  
ている。しかし、来日  
したばかりの「外国に  
ルーツがある子ども」  
たちが、日本語が上手  
に話せないことを理由  
にばかにされたり、い  
じめられたりすること  
がしばしばある。それ  
はあたかも、日本が相  
手の国よりも優れてい  
る、日本語が相手の言  
語より「優位」だとい  
うような思い込みから  
来る現象といえる。

「日本人が、相手の  
言語を単語でも覚え  
ようとしない姿勢は、  
どうなのだろうかと思  
います。相手の言語や  
文化を学ぼうという姿  
勢によって、単なる  
○国の人ではなく、人  
としての個人的な交流  
が始まると思うので

「カナダでは、定住  
するための語学支援に  
も増して、継承語(母  
語)を忘れないための  
継承語学習支援に力を  
入れています。また語  
学教育については、ど  
んな語学レベルでもプ  
ラス評価に結び付けよ  
うとします。幾つかの  
言語を完璧に話せれ  
ば、もちろんですが、  
それ以外でも、少しで  
も話せば『バイリン  
ガル』『マルチリンガ  
ル』などと評価されま  
す。一方、日本では、  
語学力は完璧であるこ  
とが基準になっている  
ので、それ以外はマイ  
ナス評価。『ダブルリ  
ミテッド』(日本語も  
継承語も不十分)とい  
う言い方がされがちで  
しい」という価値観は  
ない。相手の文化に敬  
意を払い、相手の言語  
を学ぶ努力をしている  
という「プラス評価」  
の価値観がある。こう  
なると、親は母語しか話  
せられず、子どもは継  
承語を「グローバル人  
材」の育成が始まるの  
ではないか。

高桑教授は、学生た  
ちには、相手の言語や  
文化を大切にすること  
を身に付けた上で、専  
門分野で働ける人間に  
成長してほしいと、  
「内なる国際化」プロ  
ジェクトを推進してい  
る。

(今回は5月28日付  
に掲載予定です)



明治学院大学の高桑光徳教授

「日本語も不十分)とい

「日本語も不十分)とい